

《書評》

『チョンキンマンションのボスは知っている
——アングラ経済の人類学』

小川さやか*著、春秋社、2019年

小 田 英 里†

ひととき目立つ濃いオレンジ色の表紙に目を奪われる。『チョンキンマンションのボスは知っている』という文字の右上に、中折れ帽を被ったボスらしき男性の顔写真が載っている。「一体彼が何を知っているのだろう」と、読者が好奇心を抱くことは間違いない。

本書の舞台は、香港の目抜き通りに立地するチョンキンマンション（重慶大廈）である。チョンキンマンションは、巨大な雑居ビルの一つであり、世界中から多くの旅行者が訪れ、「バックパッカーの聖地」にもなっている。本書は、同ビルを拠点とするタンザニア人が香港で紡ぐ人生や商実践、組合活動などについて、フィールドワークによるデータから明らかにしたものである。本書では、それらを私たちの社会に照らし合わせることで、現在、そしてこれからの社会・経済を再考する幾つものヒントが描き出されている。

本書は、春秋社の「web 春秋—はるとあき」にて掲載された連載に、著者が大幅な加筆修正を施したエッセイであり、インフォーマル経済、贈与論や不確実性という都市研究の主要なテーマを扱い、ICTを通じたシェアが注目されるようになったわれわれの社会をどのように再考できるのかを示す研究書でもある。本稿の前半では、著者の香港での研究に至る背景を紹介し、「チョンキンマンションのボスが何を知っているのか」という問いをもとに、本書を記述的に概観する。本稿の後半では、本書が提示する「ついで論理」と「信用」のあり方に着目し、本書が繰り広げる議論と主張を精察する。

著者である小川さやかは、大学院生であった2001年より、東アフリカ、タンザニアの都市で「マチンガ (machinga)」と呼ばれる零細商人に関する研究をおこなってきた。彼女が切り口にした「ウジャンジャ (ujanja)」とは、スワヒリ語で「狡猾さ」や「賢さ」を意味する言葉であり、東アフリカの有名な民話に登場する野兎の狡知、つまり戦略的な実践知である（小川、2011）。彼らの商慣行や商実践について、このウジャンジャな実践に注目して描いた別の著書『都市を生きぬくための狡知——タンザニアの零細商人マチンガの民族誌』は、第33回サントリー学芸賞（社会・風俗部門）を受賞している。著者の調査対象は、その後も一貫して、インフォーマル経済独自の生計実践や社会関係のあり方にある。

* 立命館大学先端総合学術研究科教授

† 立命館大学大学院先端総合学術研究科／日本学術振興会特別研究員 DC
eri.jbfs@gmail.com

著者の研究の関心は、香港と中国本土で商品の買い付けをおこなうアフリカ系商人たちの経済実践へと移り、2016年の10月、著者は在外研究で訪れたチョンキンマンションで、一人の人物と出会うことになる。この人物こそが、「チョンキンマンションのボス」と称する、本書の主人公であるカラマだ。幸運にも、評者が著者によるタンザニアと香港、両方のフィールド調査に同行する機会を持てたことを、ここに記しておきたい。

第1章では、カラマの波乱万丈な生活史が語られる。また、香港在住のタンザニア人を、香港を拠点とする仲介業をおこなう長期滞在者と香港と行き来する交易人たち短期滞在者と大きく区分し、その特徴と香港での日々が示される。香港在住のタンザニア人の中には法に抵触する裏稼業を持つ者もいるが、著者は、裏の顔に踏み込まずとも、全面的な信頼は欠如していても、ある特定の顔において真剣に「信頼」は争うことができると論じ、表の顔と裏の顔という二分法的な人間観に根ざした他者への「信用」に疑義を呈する。

第2章では、香港在住のタンザニア人が増加した背景、アジアにおけるタンザニア人の交易活動に関する議論、香港在住のタンザニア人女性の生計実践や女性独自のチェーン・マイグレーションについて述べられる。加えて、タンザニア香港組合を結成する経緯と彼らがどのような論理で組合を形成しているのかについて、「ついでの論理」が提起される。

第3章では、香港在住タンザニア人の日々のビジネスについて中古車ビジネスを事例に説明される。香港ブローカーと香港の業者やアフリカ諸国の顧客、ブローカーどうしの関係性が提示される。著者は、カラマの商実践の事例からみえてくる彼らのふるまいを、香港の業者と対等な関係を築くための駆け引きの一環として捉え、ブローカーと香港の業者との潜在的な利害関係を指摘する。また、カラマたち中古車ブローカーの仕事が、顧客と業者のあいだに入り、信用の肩代わりをすることによって成立していることを実証する。

第4章では、彼らが日々の情報交換や組合活動を行うなかで構築されてきた、WhatsAppやInstagram、FacebookなどのSNSを活用する仮想のプラットフォーム「TRUST」の仕組みについて詳述される。本章は、先進諸国で注目されるシェアリング経済やフリー経済の議論に似通ったICTや電子マネーを取り入れる彼らのビジネスのしくみを持つ「TRUST」が、「協働型コモンズ」となっていることを明らかにする。またインフォーマルな送金業者の介在によって、「TRUST」は国境を越えたクラウドファンディングを実現する生活保障としての機能も持ち合わせていることも示される。そして、こうした生活保障やブローカー同士のニッチの分け合いは、既存のオンラインビジネスで重視される「評価経済システム」を備えておらず、個人の感情や生きがいなどの数値化することができない人格的な理解・関心を組み入れた、一時的な信用を基に生み出されることを論じている。

第5章では、中古車以外に関わる仕事について、彼らの生活史から成功事例と転落事例が示される。タンザニア人の生活における仲間と生きることと独立独歩で生きることのはざまや、彼らの「ついで」の助け合いとビジネスの曖昧な境界が提示される。また、「ついで」の助け合いを強固にする彼らの相互システムは、基本的に彼らが「自力で生きている」からこそ、本当に困った時には助け合うという関係が成り立つのではないかと示唆される。

第6章は、カラマが「なぜ帰国しないのか」という問いをもとに、香港在住のタンザニア人たちの社会的世界に光をあてている。彼らの婚姻事情や香港のナイトライフをめぐる、タンザニア人女性たちもまた、現地で出会う多様な社会関係のなかで生きていることがわかる。彼らの「愛」と「金

儲け」は地続きではなく、誰かを助けることや喜ばせることなど、その営み自体に快樂が存在すると主張する。そして、金儲けという商売の論理で動いていることを彼らが公言していることで、助け合いが成り立つのではないかと論じている。

終章では、各章が総括され、経済の転換期を迎えている現代社会をどのように生き抜くかについてヒントが提示される。本書を通じて描かれた香港在住のタンザニア人の半生、ICTや電子マネーを駆使した交易のしくみ、タンザニア香港組合や日々の互酬性を通じたセーフティネットの構築、母国で展開する事業や人生設計などを題材に、新たな経済としてうたわれる既存のシェアリング経済に対する問題意識を著者はあらわにする。

本書の問題設定は、私たちの軸で展開される新たな経済のあり方を問い直し、未来を考えるヒントを提示できるのかということであった。そこで、第2章から一貫して主張される「ついで論理」と第4章で示される彼らの「TRUST」に着目する。

第2章では、「無理をしないこと」を基準とした、タンザニア香港組合の互酬性に焦点が当てられる。彼らは人間関係を築く上で、他者に求められない限り他者を深く知ろうとせず、実践や行為の帰結をその人物の評価に直接結びつけることはしない。そして、他者に対して「信用しない」という前提で、その時々状況や結果のみに応答する。こうした彼ら独自の社会システムを、著者は「ついで論理」という言葉に落とし込む。ICTやモノのインターネット化 (IoT)、AI等のテクノロジーの発展に伴い、AirbnbやUberを初めとするビジネスモデルが台頭し、シェアリング経済が注目を浴びるようになった。開かれた互酬性を基盤とする「ついで」の助け合いは、こうした「シェア」の実践にも通ずるものであり、彼らが構築した組合は、市民社会組織の論理よりもシェアリング経済の論理と近似していることが主張される。だが他方で、「誰も信頼しない」を基礎に、一時的で人格的な信頼を争う「TRUST」は、ユーザー同士の格付けシステム（評価経済システム）によるシェアリング経済とイコールではないことが主張される。本書は、現代的なシェアリング経済が、実際には信用を遂行できない他者を排除するシステムであることに注意を向けている。

すなわち、本書は香港在住のタンザニア人のインフォーマルな交易システムやコミュニティの成り立ちを通じて、資本主義経済に贈与や分配の仕組みを導入しようとする現代的な試みが、どのような可能性と問題をはらむのかという普遍的な問いに取り組んだものである。ともすれば、本書の記述には、香港在住のタンザニア人の経済実践や社会の特徴を「異文化」の問題であると短絡的に解釈させてしまう危険性が見受けられる。もちろん、著者はこの点について、ある種の不確実な状況における合理性の強調によって、タンザニア社会あるいはアングラ経済独自の特徴とすることを否定しているが、より慎重で丁寧な補足が必要であると思われる。また、香港のタンザニア人たちがICTや貨幣そのものにどのような価値観を抱いているかについても、掘り下げる余地があるように感じられた。

とはいえ、これらの点が本書の価値を損ねることはない。本書を開いた頃、評者は自己意識の持ち方、無意識にかける他者への希望や期待について、まさに模索していた。著者がこれまでに会ったタンザニア人たちの「人生は旅だ (maisha ni safari)」という言葉は、評者の心に強く残った。本書が述べるように、いま私たちが生きる社会では、「現在」と「未来」をつなげて、安心や安全を手に入れようともがき、リスクを減らすべきだという考え方が浸透している。そうした社会の中で、私たちは、日々の快樂や心の余裕を失い、生きづらさを感じる機会が増えてきたように思う。それに対して不安定で不確実な状況が持つ意義を、「チョンキンマンションのボス」であるカラマは知って

いたのである。

未熟なフィールドワーカーである評者は、特に第6章と終章で描かれる著者の研究姿勢と記述からみえるデータへの向き合い方から、どのように研究成果を開示するかを学んだ。本書は、新たなビジネスに取り組むための柔軟な指南書になりうるだけでなく、これから文化人類学を志す大学生・大学院生に入門書としても推奨したい。

評者はチョンキンマンションで、ニット帽にTシャツとパンツ姿で全身緑色の服に包まれたクリスマスの妖精のようなカラマに声をかけられた。著者から事前に聞いていたボスの姿とのギャップがあまりにも大きく、その一瞬で彼に魅了され、不思議で魅力的な彼と著者を重ねた。本稿が、本書をより多くの人々が手に取るきっかけとなれば幸いである。

参考文献

小川さやか（2011）『都市を生きぬくための狡知——タンザニアの零細商人マチンガの民族誌』世界思想社。